

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 2 5 年 5 月 1 5 日現在

機関番号：3 2 6 1 2

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：2 1 5 2 0 8 2 8

研究課題名（和文） ト라우マを背負う文化集団成員の受容の場としての多文化相互諸過程の文化人類学的研究

研究課題名（英文） Cultural anthropological research on reflexive interaction/negotiation processes across groups of different multicultural backgrounds as forming a receptive and supportive space for redressing/reconciling aspects of experiential predicament of members in traumatized cultural groups.

研究代表者

宮坂 敬造（MIYASAKA KEIZO）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：40135645

研究成果の概要（和文）：苦境におかれ「トラウマ」的集合経験をもつ特定特性集団成員とそれを共感的に受け止める他の文化集団成員との相互交流過程に注目し、両集団間が共同で行う「トラウマ」記憶の再同定とその克服の活動を、象徴的社会的文化表現再構成過程として捉え、文化関係論的な視点にたつ文化人類学の理論と方法から研究調査した。国内外の難民・先住民・トラウマ症例者等の事例調査文献蒐集をおこない、理論枠組の開拓と基本線の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：

Focusing mutually reflexive interactional/transactional processes as found in the phase of the mutual relationship formation between groups of different multicultural/subcultural/identity-related differences, this study has clarified the relevant significance of the anthropological/transcultural studies perspective that tries to delineate in the above multicultural group processes the space formation for redressing and reconciling traumatic experiences in the predicament of members of culturally minority groups such as refugees, self-help groups of psychiatric outpatients, indigenous groups, and descendants of those traumatized during wartime. Through both short term researches in Japan and overseas (Canada, Singapore, Australia), this study has collected filed data concerning the above aspect and has prepared its own analytical framework concerning reflexive differentiation of new spaces within multiculturally complementary patterns of relationship formation among groups of different backgrounds.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：文化的集合的トラウマ経験・多文化相互諸過程・多文化演劇・文化医療人類学

1. 研究開始当初の背景

これまでには以下のような研究活動があり、

それを通して、本研究課題の構想に導かれた。

(1) 構想の発端は 2003 年「20 世紀と < トラウ

マ>」講座企画だが、同年12月来日のT.Nathan教授(パリ第8大学民族精神医学研究所【当時】)の講演(仏政府ルワンダ派遣研究報告としての94年虐殺後の後遺症と和解問題討論)に強い印象をえた。

(2)本務校研究休暇期間2004年度に、カナダMcGill大学Transcultural Psychiatry部門とSocial Studies of Medicine学科の客員研究員として、Laurence J.Kirmayer マギル大学医療人類学教授や、Allan Young 学科長(当時)の指導のもとに、文化医療人類学の見地からの<文化精神医学における移民の多文化的事態における治療実践>を研究。Kirmayer 教授の多文化間臨床事例研究会で拷問や虐殺の集合的トラウマの事例に接し、モントリオールの難民支援機関の関係者に接触し、Vancouverの拷問難民支援団体関係者と面会機会をもつ等、移民の苦境に関わる準備的知見をえてきた。同大学Allan Young教授の一連のベトナム戦争トラウマの人類学的研究についても学び(宮坂15:2006)同教授を2007年度慶大大学院特別教授に招聘し講義・研究会を開催した(宮坂5:2008等)。また、インド系演劇家などが行っていた多文化間演劇を通じた人種問題や移民の苦境をめぐる劇と、その劇活動が担う広義の和解の可能性について気づいた。また、Concordia大学のE.Little教授の地域共同体関与演劇研究について同教授を通して知り、文化医療人類学においての移民の苦境やトラウマをめぐる諸研究と接続できる可能性に気がついた。

(3)これまで海外講師を招いて開催してきていくつかの分散的テーマが結びついて、新しい観点からの全体的連関がみえてきた経緯があり、J.Arpin医学および人類学博士を慶大に招きいた際に(2004年7月24日講演会「"Masters of Their Conditions. At the Crossroads of Health, Culture and Performance"」開催)演劇と文化人類学、そして文化精神医学の治療が有機的に結びつけた研究や治療の実例に接したことも、後の研究構想展開のヒントになった。

(4)2008年度までの別の科研費研究「文化を跨る媒介者として変貌するエスニック芸能者群像の文化関係論的文化人類学的研究」実施の際に、多文化的背景をもつ他の芸能家や演劇家が共同作業のなかで、<間文化的共同作業>を作品制作過程のなかで実践している近年の傾向があることが見出された。また、2007年4月26日に招いて行った研究会「"Creative Potentials of Interculturalism and Multicultural Theatre in Contemporary Context of Southeast Asia"」の講師Kukathas氏から、豪州先住民と共同作業演劇を行う白人演出家に紹介された。

2. 研究の目的

苦境におかれた集合経験をもつ民族集団成員とそれを共感的に受け止める他の文化集団成員との相互の交流過程に注目する。両集団間が共同で行う「トラウマ」記憶の再同定とその克服の活動を、象徴的社会的文化表現再構成過程として捉え、文化関係論的な視点にたつ文化人類学の理論と方法によって研究調査することが本研究の目的である。学際的開拓分野として現代医療人類学、文化精神医学の諸研究の流れに通底する枠組みに基づきつつ、演劇芸術のパフォーマンスの文化人類学の関連理論を参照し、新しい分析モデルを開拓することも目的となる。

そうした分野に跨る文献研究のほか、拷問のトラウマをもつ難民への支援団体(日本とカナダのNPO機関)やMcGill大学医療人類学・文化精神医学グループがもつ同関連データ(拷問のほか虐殺生存者に関わる集合的トラウマ事例)蒐集と面談調査、カナダ・日本・マレーシア・豪州で行われているアジア各地の演劇人による異文化間共同演劇作成活動、更には、異なるエスニック集団を跨って集合的トラウマを背負う証人を演劇に参加させるCommunity-engaged Theatre活動に関して、関連資料蒐集とインタビューと一部参与観察調査を行う。文献調査および日本で行われた集合的トラウマをテーマとする多文化演劇的試みについての事例把握、日本での関連難民移民事例の把握等、国内調査を主としつつ、短期海外調査も行う(海外研究協力者、L.J.Kirmayer マ、E.Little コンコーディア大学教授(多文化演劇学)、R.Varma氏(モントリオール多文化演劇演出家)、J.Kukathas氏(マレーシア:多文化演劇企画演出家)、T.Collie氏(豪州クィーンズランド演劇家:先住民との多文化演劇)、J.Arpin医博(文化精神医学・演劇人類学両学位をもつスイス臨床医)。

本研究で明らかにしたいことは、戦争や紛争や移民難民後の苦境に由来するトラウマ、拷問や虐殺被害関係等の集合的トラウマを背負う文化集団の成員が、ホスト社会側などの他集団の共感的支援による多文化的交流媒介過程に関わるうちに、そうした集合的トラウマの記憶を再度同定し再定義再構成し、調整しながら、立ち直っていく経過の特徴や条件である。この過程では、文化政治的な意味の取り引きの相互過程が生じ、間文化的象徴的解釈過程が現れ、それによって、相互に立場位置が違いつつも、集合的トラウマを相互に調整し再構成していくような、相互関与による共同集合過程が現れてくると思われる。そうした過程は、間文化的な相互過程を通じて現れてくる共同連携関係により、異文化間相互理解に比するような共通認識が形成されるものと思われる。臨床的治療を必

ずしも含意しないこのような過程は、多文化間臨床コンサルテーション治療やトラウマ緩和を謳う集団場面ケアという形態での支援関係過程と、それぞれ違いはあるものの、ある位相では同型である、というのが本研究の仮定である。この同型の過程を解明するための文化関係論的文化人類学理論の確立という理論的な構想に立つ。この構想に関連して、通常の文化人類学的儀礼理論に間文化的媒介という観点を組み入れ、儀礼理論を拡張改訂しつつ、多文化相互関係状況下で行われる儀礼と文化社会政治的過程を捉えうる新たな分析モデル設定を試みる。この場合、多文化状況で行われる Community engaged Theatre の中に、一種の危機の儀礼的象徴表現が現れる可能性を実例を通して解明することが、理論的開拓に必須の課題となるとの見通しを持つ。苦境を背負い集合的トラウマをもつ文化集団成員が、多文化演劇という多文化関係状況に置かれて、トラウマ該当事件の証言者等の形で作劇実施に加わる過程は、該当成員個人をとりあえず対象とする多文化間臨床コンサルテーション治療過程に比して、小集団相互が多文化状況で関係する文化社会政治的過程が明瞭に現れる。この点で前者は文化人類学の枠組みを用いてより有効に理解可能と思われる。上記の意味での多文化演劇の作劇上演過程は、上述のごとく小規模社会研究に由来する文化象徴人類学の儀礼理論を多文化相互関係状況に拡大するかたちで修正して用いれば、その文化社会政治的な象徴表現による集合的意味変換の様相を明らかにできよう。なぜなら、この作劇上演過程では、儀礼的なものを転換過程の危機の集合経験に重ねて象徴的に表現する経過が生じると思われるからだ。多文化演劇における実際の実例の蒐集と分析を通して、この点を確認し、解明を試みる。V. Turner 1969, 1982, 1986 は小規模社会の儀礼過程の理論を、「社会劇」概念を媒介に現代社会の liminoid 現象へ適用する視点を示したが、本研究は、この方向で展開した儀礼・演劇・パフォーマンスの象徴人類学理論を多文化関係過程に現れる象徴的社会的過程に拡大する試みでもある。そうした作業を経て、今度は、多文化間臨床コンサルテーション治療に現れる治療効果をもつ象徴的転換過程を捉え返す。多文化演劇の作劇上演過程と通底する上記の「同型」位相を宿す場としての治療過程の特性を解明することによって、Kirmayer 教授が計画する「多文化間コンサルテーション治療で採用される文化概念の、治療過程における動的変容」研究プロジェクトに対して、その一部に有効となりうる分析モデルの提供も目標となる。臨床の場も多文化演劇の場も、トラウマを背負う文化成員を受容する多文化的境域の位相の

場として捉えられよう。即ち、多文化間関係状況におかれた異なる文化背景の成員同士が、相互接触にあわせて思考や価値、感情を相互に変容させていく位相だが、この位相の場の共通性に焦点を合わせることにより、それぞれ異なる展開経緯をもつ諸領域の理論が噛み合っ組み上がる展望が生じるのである。この展望から、多文化演劇の作劇上演過程を危機の儀礼を含むような象徴社会文化過程として記述していくことも目的である。

以上に述べた理由で、本研究は、三つの研究領域、即ち、トラウマと暴力、戦争、民族浄化の文化人類学的研究 (M. Lambek 編著 1996, A.L. Hinton 編著 2002a, 同 b の研究に代表されるが、近年はそれまでの理論的展望の革新はなく、異なる地域や事例への適用が主)、トラウマの医療人類学・多文化間精神医学的研究 (A. Young 1995, 2007, L.J. Kirmayer 1996, 編著 2007, A. Kleinmann 1997, カンボジア事例を扱う R.F. Mollica 2006, 同事例難民子女集団ケアを扱う K. McShane 2007 等の研究に代表される) そして、儀礼・演劇・パフォーマンスの象徴人類学的研究 (前述 V. Turner に加え、R. Schechner 1993, 近年では、J. Arpin 2003, 2008) の諸領域を比較参照しつつ、新しい分析モデルを開拓する学際的開拓分野の性格をもつことになる。特に、苦境とトラウマが顕在潜在表現焦点となる多文化演劇を、トラウマの人類学と医療人類学・多文化間コンサルテーション文化精神医学に関連させて研究する点は、先例がないと思われる。これによって、小規模社会研究にもとづく儀礼や象徴社会過程の理論視角を修正拡大し、集合的トラウマ研究に関わる二大枠組みである人類学的社会文化的構成論と医療人類学・多文化間精神医学の臨床治療論とを媒介する新しい理論的地平が獲得できるものと思わる。グローバル化で出現したトランスナショナルなエスニシティ現象の文化人類学や医療人類学研究の視野の一角に、多文化演劇を包含できる展望も得られる展望をもつ。

3. 研究の方法

本研究は、国内調査を主とするが、大学夏期冬期休暇期間に一定の範囲で、カナダのモントリオールとヴァンクヴァー、オーストラリアのブリスベンとその周辺地域、シンガポール、マレーシアのクアラルンプールでも比較短期調査を含んでいる。

この目的のため、上記の二つの分野に跨り、文化関係論的に再分析可能な事例や個別論文を照合していく文献研究を行う。集合的トラウマについての研究は、たとえば、B.K. Axe の "The Nation's Tortured Body: Violence,

Representation, and the Formation of a Sikh "Diaspora"2000 のような研究をはじめとしてマイノリティの「離散」に焦点を当てる研究はすくないし、ボスニア・ヘルツェゴビナの戦争と「民族浄化」の政治人類学的研究のように、戦時下でのトラウマに焦点を当てた研究も少なくない(B.Denich 1994 等)。それに呼応して、被害者の多文化間臨床的治療の報告のような医療人類学・文化精神医学的研究も一定数散見される(C. Kidron 2003 等)。本研究はまず、こうした文献で本研究のために再分析可能なものを蒐集し Review 文献研究を初年度から継続的に行う。

また、本研究は、トラウマを背負う難民移民の事例を扱う現場のひとつとして拷問トラウマを背負う難民を支援する NPO 団体に接触し、彼らの対処方略や関連情報を探る。このため、日本の関係団体、カナダのヴァンクーヴァーの NPO 団体に短期調査で接触し、インタビュー面接法による調査や資料収集をおこなう。

あわせて、苦境を背負いトラウマをもつ難民・移民対象の多文化間臨床コンサルテーション過程で典型的に問題となる臨床過程を把握するため、McGill 大学文化精神医学部門に関わる資料の蒐集と検討を行う。更に、文化背景が異なる一般市民を演劇上演に参加させつつ、台本作成をおこなう Community-engaged Theatre の事例蒐集と関連研究文献調査を、モントリオールのコンコーディア大学 E.Little 教授や R.Varma 氏の研究協力を得て行う。日本ではまだ同種の試みが乏しいが、東アジア・東南アジアの俳優が集まって共同で演劇を制作していく試みの先行事例があり、関連情報を蒐め、日本側演劇関係者にインタビュー法による面接を行う。多文化間共同作劇の過程は一種の間文化的他者理解のかたちで現れる点に、本研究は注目し、演劇とパフォーマンスの象徴人類学研究の枠組みを統合的に組み込んで、製作過程の一部を参与観察研究・分析する。また、来日したルワンダ虐殺をみつかったアフリカ演劇団に関して、事後的に事例調査し、類例を調査する(大震災トラウマ事例は多文化過程がある範囲内で扱う。また豪州先住民多文化演劇を Dreamtie 文化概念との関係で扱う)。なお、NPO 調査は情報開示限界に適合する形で実施。

こうした計画・方法によって、理論的開拓の成果を示しつつ、多文化臨床コンサルテーション治療過程と、多文化演劇作劇上演過程にみられる「苦境と集合的トラウマの象徴的表現による再構成過程」に同型の文化関係過程が現れる条件や位相をつきとめ、あきらかにしてゆく。集合的トラウマをもつ文化集団成員が他者文化集団と関わる多文化媒介過程で立ち直りをみせる経過を焦点化し、それ

を新たな理論視角から捉えつつ、事例的にこの過程を明確に捉えることを狙いとす。

4. 研究成果

上記の研究目的と方法にもとづき研究を実施し、以下のように各年度ごとの成果を得た。(1)平成 21 年度は、再分析可能な関連文献を蒐集 review する文献研究の中核部分を終えた。9 月移民治療で著名なロンドンとパリの多文化精神医学研究所訪問し、多文化間精神科医やトビー・ナタン派の民族精神医学研究治療医や臨床心理士と面談し、移民の治療の現状を把握。また、トラウマを負う難民移民事例を扱う現場たる内外の難民支援団体に接触し、彼らの対処方略や関連情報を探る第 1 段階の調査構想を進めた。更に、文化背景が異なる一般市民を演劇上演に参加させてトラウマや摩擦に関わる台本を作成する Community-engaged Theatre の事例蒐集と関連研究文献調査を、国内該当事例について実施。その関連で3月中下旬、海外出張調査した(具体的には、インド・トリヴァンドラム:アフリカ・アジアからの視力障害者中心に社会事業企画訓練を行う ISE で、戦争や障害によるトラウマ経験に関してのインタビュー調査等;シンガポール:多文化関連演劇での戦争トラウマの表現を調査;ドイツ:映像で捉えられたトラウマ感情という観点を補助線とし、科学映像記録アーカイブ IWF で短期調査)。

(2)平成 22 年度は、難民の文化的集合的トラウマ経験に関して、実際の面談が進み、難民の苦境と生活史の多様な事例の幅を了解することができた。トラウマの治療に当たる治療者に加え、トラウマを克服した元の難民申請者たちが、治療とは異なるが難民のトラウマの克服に一定の媒介的役割を果たす様相が注目され、象徴的社会的文化表現再構成過程としての多文化相互諸過程にこうした媒介的役割を組み込んで検討すべきことが分かった。また、日本発の森田療法が効果がある点を多文化間の文化医療人類学の視点から検討事項として取り上げた(国内調査:難民事例文献の収集分析、来日したトラウマを負う難民治療関係者との面談、海外医療援助関係者との面談。海外調査:3月下旬、カナダの Vancouver で、難民支援治療機関における難民申請者および治療スタッフとの面談調査、British Columbia 大学で文献調査のほか、臨床心理学者たちとの面談)。

トラウマを扱う多文化演劇に関しては、東南アジア域内共同作業の現場確認の継続およびルワンダ虐殺劇を取り上げる Singapore 演劇人の背景に着目して調査した(国内:過去に東アジア東南アジアの演劇人を集めて合同で戦争のテーマを下敷きにした多文化間合同作業としての創作劇関係者への継続面

談・資料の収集。海外：前年度短期調査の継続のかたちで4月のSingaporeでの調査(5日間) Kuala Lumpur 1日間の調査で、戦争の記憶等に関わる間文化的共同制作を行う中国系・インド系・マレー系の演劇関係者との面談、Nanyang 工科大学の社会学者、人類学者、歴史学者、および Malaya 大学演劇研究者と面談を実施)。これらの短期調査の一部の知見を用いて、移民の苦境と生活感情、医療人類学におけるトラウマとセルフヘルプグループおよび自己の分裂の問題、負の感情の克服というテーマに絡ませて研究発表を行った(8月16日京都大学、11月5日早稲田大学など)。

(3)平成23年度、まず Vancouver で難民支援治療機関における難民申請者で心理療法をうける方々(イラン、イラク、メキシコ、コロンビア、チリ、グアテマラなどから来加した人々とその子供の家族)および治療スタッフ、また、関連して無宿者支援機関の関係者との面談調査を実施。北海道浦河町の社会福祉法人べてるの家に参観滞在し、トラウマに関わる症状をもつ方々との面談、集団過程、地域社会との交流の現状を調査。10月ローマで、研究課題に関わる内容をふくむ学会発表を行い、ローマでの移民への医療支援の機関等を訪問して面談および資料の収集を行った。多文化間演劇関連では、国内関与者への面談を継続し、11月に来日した台湾やタイの演出家と面談調査を行った。2022年2月25日には、カンボジア虐殺関連被害者のトラウマの治療を行う Monash 大学の P. LeVine 准教授を招いて研究会を行った。こうした研究実施を通じて、文化間における諸集団の交錯的相互作用過程全般の構造的動態のパターンとして本研究課題を位置づける方向を見出した。

(4)平成24年度は、当科研費最終年度の年で成果を纏めるため不足点の追加調査にあてたが、予算面と海外研究協力者のマギル大学の医療人類学者 Allan Young 教授の慶大学社会学研究科への来日時期が8月後半設定のため、夏予定の海外調査を3月にずらし、夏は北海道浦河町と東京での追加調査にあてた。海外に関しては、追加調査地をシンガポールで実施(Nanjang Technological University の臨床心理学者で多文化間臨床をおこなう B. Lee 准教授の関連研究にもとづく討論と現状認識、多文化演劇の S. Thirnalán 演劇監督のリハーサル参観と討論、劇作家・演出家 A. Tan 氏との討論)。あわせてトラウマの学会参加もかねてメルボルンの多文化間精神医学ユニットおよび地球保健多文化間精神医学研究所、難民支援機関 Foundation、それに研究協力者の Th. Collie 氏、Queensland 州立劇場芸術監督に赴任した W. Enoch 氏との面談と多文化間演

劇の鑑賞をブリスベインで実施。トラウマ的集合経験をもつ民族集団成員とそれを共感的に受け止める他の民族集団成員とそれを共感的に受け止める他の文化集団精神との相互の交流過程の特質の事例的研究の関連文献追加調査、震災トラウマをもった精神疾患緩解自助集団、多文化間共同演劇制作に関連した演劇人との面談追加調査を実施。

関連テーマを含む研究会(9月4日、Colonial Medicine [ローマ大学 G. Schirripa 准教授の講演に対するコメント]、10月25日・カンボジア虐殺と移行的記憶：ラトガース大学 A. Hinton 教授の日本文化人類学会関東地区研究懇談会企画とコメント)を実施した。

調査成果の一部は研究会コメントに加え、9月の国内機関での英語発表、論文執筆は平成25年度に予定。予算等の関係で計画の一部が実行できなかったが、特にヴァンクーヴァーの難民支援機関の追加調査を今後の新しい計画で補ってゆきたい。

(5)交付科研費の縮減などの要因で、当初計画の調査の範囲を縮小しつつ研究を実施したが、本研究の基本部分に関しては成果達成できた。すなわち、「集合的「トラウマ」についての現代人類学的研究方法と文化精神医学・医療人類学・多文化間治療を基盤とする研究方法とを統合的に用いる本研究の枠組の確立と展開、集合記憶の社会文化的構成過程を捉えつつ記憶の文化政治学的様相を研究する方法の確立と進展、多文化間臨床場面・文学・演劇に表現されたトラウマ経験表現をも焦点化しながら記憶の Landscape を分析する集合的トラウマ論の視座の確立と展開、以上の～を組み合わせながら、多文化間を媒介的・再帰的に関連させる過程を焦点化しうる文化関係論的視座に立つ理論的枠組み開拓。集合的トラウマの医療人類学研究の既存成果を確認し、個別民族集団に参与観察の基礎をおくトラウマの人類学的研究の既存成果を確認しつつ、集合的トラウマが多文化媒介状況により他集団との相互関係過程のなかで再同定され再定義される象徴的社会文化過程を、構造動態の様態をみる視点から分析しうる斬新な視座の獲得、である。本研究では難民・移民過程や相互接触事態を通じて、集合的トラウマを負う文化集団と理解・支援を行う他文化集団とが関わる様相に注目し、彼らが治療や象徴的表現活動を通じて自文化他文化を背景とした再帰的立ち直りを他支援集団との関係過程の中で志向する様相を問題焦点に据えるかたちで、上記の記したフィールド短期を実施しながら、基本的様相の特性を析出できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計1件)

(1) Miyasaka Keizo.

Embodied Experience and Personhood:Towards a Cultural Study of Logic and Sensibility. CARLS SERIES OF ADVANCED STUDY OF LOGIC AND SENSIBILITY. 査読無, pp. Vol.4, 2011, 425-441

[学会発表](計12件)

(1) 宮坂敬造(司会・総合討論)

「虐殺とトラウマ研究の最前線」ラトガース大学文化人類学者 A. ヒントン先生をお迎えして-トラウマにかかわる多分化間集団相互過程」, 日本文化人類学会、関東地区研究懇談会、2012年10月25日、慶應義塾大学三田キャンパス

(2) Keizo Miyasaka

“ Transcultural Perspective on Diversities of Imaginational and Practices concerning Cross-cultural and Cross-species Communication ” ,Paper to be read at the conference on “ Cross-cultural and cross-species communication, ” International Institute for Advanced Studies. 2012年9月15日、国際高等研究所

(3) Keizo Miyasaka

“ Personhood, Rationality and the Senses: Cultural Anthropological Approaches to Overcoming the Dichotomy of Logic and Sensibilities. ” ,Global COE Symposium “ Toward an Integration of Logic and Sensibility, Keio University. 2012年9月12日、慶應義塾大学三田キャンパス

(4) 宮坂敬造

「発達障害者の経験世界の文化医療人類学的研究：身体感覚の語り、および音楽療法による臨床的係わりの検討を通して異なる身体感覚世界に接近しうる可能性を探る」キックオフ・シンポジウム「今、人間関係の論理と感性を考える」, 慶應義塾大学論理と感性のグローバル研究センター、2012年6月10日、慶應義塾大学三田キャンパス

(5) Keizo Miyasaka

Medical anthropological investigation as to the effect of supportive semi-therapeutic sessions on reorganization of embodied experience, sensory awareness, and split selves. Medical anthropology workshop on global medicine and cultural diversity, Relio. October 15th, 2011, ローマ、レリオ・インスティテュート

(6) Miyasaka, Keizo

“ Overcoming Deep and Intense Negative Emotion: Laughter as found in Cultural Tricksters ”、こころの未来シンポジウム『「負の感情」の克服への方途 心理学、宗

教学、人類学による東西の文化比較から』2011年2月21日、京都大学

(7) Miyasaka, Keizo

Medical experience in-between biomedical cares and cultural illness. Seminar of Medical Anthropology, Global Medicine and Culture Diversity: The Role of Medical Anthropology 2010年11月5日、早稲田大学

(8) 宮坂敬造

「底つき感と文化」, 負の感情研究会「負の感情」は何か? 「底つき感」の通文化比較とその手法としての映像」, 2010年8月15日、京都大学

(9) 宮坂敬造

文化研究と臨床実践差点：総括と展望、「他社認識・共生にのぞむ感性：文化研究と臨床実践の交差点」慶應義塾大学人文グローバルCOE研究セミナー、2010年3月22日、慶應義塾大学三田キャンパス

(10) Keizo Miyasaka

Significance of anthropological approach to Emotion: ranging from sorrow to collective trauma (opening speech)

「Anthropological Approaches to Emotion 感情の人類学：映像からのアプローチ」慶應義塾大学人文グローバルCOE研究セミナー、2010年12月16日、慶應義塾大学三田キャンパス

(11) 宮坂敬造

映像実践を通じたこころの学際的研究 文化と医療誌における映像をおもな対象として、京都大学こころの未来研究センター連携研究会議、2009年12月15日、京都大学

(12) Keizo Miyasaka

The filming of visual sensibilities and filming process of the human mind. ” (individual presentation); “ The visual and academic turn in contemporary Japanese academia. ” (Opening speech as a chair) .1st International Visual Methods Conference. September 17, 2009 University of Leeds, England.

[図書](計1件)

(1) 宮坂敬造ほか編

「リスクの誘惑」慶應義塾大学出版社、2012、全324ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮坂 敬造 (MIYASAKA KEIZO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：40135645